

外科医の本分



365日 24時間医師・
幕内雅敏先生の言葉

私は一外科医以上の者ではなく、
一外科医以下の者でもない。
だから、
外科医を続けているんです。

「教授なんて生活は、雨も降れば風も吹く大変な日々が 待っているんだぞ！」

木村 理

幕内教授の学問業績以外の外科医感、人生観、社会観などを後進に伝える、という趣旨で記します。印象に残り、強く記憶している言葉はいろいろありますので、思い出せる限り書いてみたいと思います。

* * * * *

1. 「おまえな、教授なんて生活は今日の天気みたいにからっと晴れあがっている日だけでなく、雨も降れば風も吹く大変な日々が待っているんだぞ！」（東大第二外科教授室で）

* 山形大学教授選に合格し、私を送り出す時の言葉。

2. 「どんどん教授になって出て行ってしまうから、東大の中が手薄になってしまって俺は大変だ」（東大第二外科教授室で）

* 私の後、窪田敬一先生も高山忠利先生も教授になった時。

3. 「紙をかけ！」（東大オペ室、医局等で）

* 英語の論文を書けということ。この言葉の前に「xxをかいてないで」という文言が入るが、お下劣すぎてとても書けないので、知りたい人は直接私に聞いてください。

4. 「女をだましてはいけない！」（東大オペ室、医局等で）

* どういう脈絡でおっしゃったかは忘れてしまったが、医局員の前で数回以上言っていたと思います。

5. 「オペ室をだましてはいけない！」（東大医局等で）

* 土曜日も日曜日も祝日も普通に手術をしていたので、麻酔科の先生方、手術室の医療関係者の皆さまには心から御礼申し上げます

す。

6. 「明日、緊急で右葉切除だ！」（東大医局カンファレンスで）

* 私が東大第一外科から、第二外科 幕内教授のところに移って間もない1997年5月2日、HCCによる胆管炎の症例に対して。5月3日という大型連休のど真ん中で緊急で肝右葉切除手術をやってしまうことに驚いたが、その後同様の状態がずっと続くことがさらに驚きの連続であり、そのうち慣れた。

7. 「登外科部長は国保旭中央病院で廊下を歩きながら論文を読んでいた。大学病院じゃなくてもどこでも勉強はできるということを、若かった外科医の自分に教えてくれた！」（東大医局カンファレンスで）

8. 「しっかり勉強して、365日しっかり患者さんを診る。

結局、医者に休みはないんだ。

そのことに矛盾を感じなくなれば、

きっと良い医療ができるよ」（東大医局等）

* 働き方改革の今日ではとても言えない言葉。約30年前の言葉である。

9. 「君は1-2-1か・・・、僕は2-1-2だけだね！」（東大第二外科教授室で）

* 私は東大第一外科から第二外科系の肝胆膵・移植外科に移り、さらに山形大学の第一外科に赴任することになった時に言われた言葉。幕内先生は東大第二外科、信州大学第一外科、東大第二外科と歩んできたことを言っている。

10. 「夏休みは1年間に書いた英文論文のImpact Factor の合計数だけとっていい！」

* …とはいうものの、ほとんど1日も取れませんでした。

11. 「車を出してくれ！」

*弟子たちの車2～3台で出かけた。文京区弥生、日本医大前の蕎麦屋「夢境庵」に毎週日曜日に弟子たちを連れて行っていた。蕎麦湯がまずお茶がわりに出る風流なお店であったが、今は無くなってしまった。

12. 「忘己利他」

*教授室に飾ってあった幕内教授手書きの色紙。

13. 「若い人に言いたいのは、勉強をしっかりとやりなさいということ。学生には学生の時に読む本、卒業して専門に進んだらその時に読む本があるんだよ。広い知識があることで、患者さんを救えるんだ。知識がない人は患者さんを救えない。知識がないと患者さんを目の前にして、どうすればいいのか分からない。だから厳しいんだよ」(医局にて)

14. 「晩年には自分が教授にした全国の弟子たちを訪問して歩くような人生を送りたい！」

15. 「木村、手術をしろ！ 教授が手術をしないような医局はダメだ！」

*幕内教授は東大では基本、手術室にずっといた。水曜日の手術で教授会のある日は教授選の投票のみ行って、すぐに手術室に帰ってきた。

山形大学赴任後、私は膀胱癌、肝臓癌、肝門部胆管癌、食道癌、胃癌、大腸癌、潰瘍性大腸炎の大腸全摘術、乳癌の手術を含むすべての手術に入り、術者として執刀するようにした。東大第一外科時代は消化器・乳腺甲状腺全てのグループがあり、関連病院でも手術していたので、それが可能であった。食道癌手術も20例執刀しており、患者さんは全て歩いて帰っている。のちに山形大学退任時に部下が過去の手術記載を整理していて「先生。本当に

やっていたんですね」と驚いていた。

その後学内外の仕事に追われたが、退任近くなってもできる限り肝胆膵の手術は続けた。

16. 「40歳までは親のスネかじれ」

*医学の修練は厳しく若い時に十分に手術手技や術後管理を身につけておく必要がある。バイトしている暇はない、ということ。

この患者を中心とした生活を送るという圧倒的努力を継続することにより、幕内教授は世界一の肝胆膵外科治療集団を作り上げた。幕内門下からは多くの優秀な教授が輩出された。

17. 「川崎に頼め！」

*山形大学でまだ生体肝移植を行なっていなかった時、2006年前半、生体肝移植適応の肝不全の人をどうしたらいいか相談した時。幕内教授はヨーロッパに講演中で、信州大学教授の川崎誠治先生にお願いしなさいとのことであった。患者さんは自衛隊のヘリで輸送、われわれは新幹線等を乗り継いで松本まで行き、手術に加わった。

ドナーの同意がなかなか取れず、手術開始が21時になった。夜に肝移植の手術を開始するのは体力的に大変で、以降信州大学では生体肝移植の手術を夜始めることは絶対にないという。

18. 「木村ちゃん、手術、上手くなった！」

*山形大学の教授になって数年が過ぎ、言われた言葉。教授になって教室を背負っていくと、その責任から手術に磨きがかかってうまくなるが、その通り上手くなったな、と言われた。

19. 「外科は演歌の世界」

*…ということで、いつも幕内先生の手術場では演歌が流れていた。これに合わせて演歌を口ずさみながら手術をされることもし

ばしばあった。

20. 「木村、いつ手術にするんだ？」

* 重症急性膵炎の患者回診の時に私に毎日尋ねていた。なるべくICU治療を長く保存的にやり、ネクローゼのデマーケーションがはっきりしてからの方がいいです、と答えていた。

結局発症から3週間後くらいに手術になったが、成功した。

21. 「手術死亡率（の数字）が5年生存率（の数字）を超えるような手術はやってはいけない！」

* 当時膵癌に対する抗がん剤（S-1、nab-パクリタキセル、FOLFILINOX、ニボルマブなど）はなく、肝右葉切除+PDなども試みられていた状況でおっしゃられた言葉。今から振り返ってみれば、そんな手術をやっていたのか、と時代を考えてしまう。

また膵癌は5年生存率が数%で、手術死亡率が5%を超えていた時代があった。

22. 「金曜日から土曜日・日曜日の診てない間に患者は悪くなる！」

* だから土日でも回診して患者さんを診よ、ということ。

23. 「〇〇〇（医局員の名）がペチャクチャおしゃべりして唾飛ばしながら入れるから感染するんだ！」

* CVのカテ先感染に対して。決してそんなことはなく、半分冗談で言われた言葉である。

24. 「見るな！」

* 肝右葉切除の前立ち（第一助手）をやっていた時言われた言葉。短肝静脈処理の時は前立ちが乗り出して覗き込むと、肝を自分のほうに引いて、より脱転してしまうため、短肝静脈に緊張がかかって損傷する恐れがある。

「きむらちゃん、見たければ手を下ろして、俺の背中側に回っ

て覗き込むように見なさい」と。

25. 「そうか、それじゃ！」

*幕内先生が最初の手術を終わって、次の手術に第二助手で入ってきた時、吸引器で切離面の血を吸引しながら、肝臓をどんどん割り始めた。執刀医が「幕内先生、どうぞやってください」という言葉に対して。

結局、幕内先生が術者になって肝をPean flexured Method で割り始めた。

写真1：山形県初の生体肝移植
(山形大学第一外科、2006年6月)

幕内先生に来ていただき成功した。
ドナーの手術が終わり、レシピエントの手術を執刀していた私は、この写真では幕内先生の前立ちをしている。

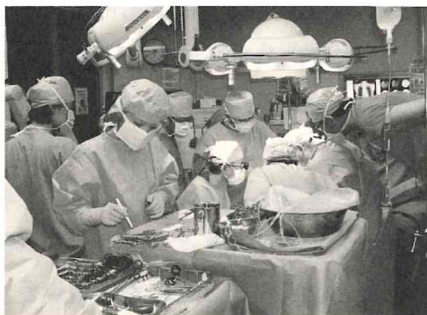


写真2：山形大学第一外科教授室にて

毎年、学生の講義に来ていただいた。幕内先生がそば好きで、講義の後には山形駅近の三津屋で蕎麦を食べるのが慣例になっていた。

外科医 3 兄弟の中の幕内雅敏の生き方

幕内 博康

本書「外科医の本分～365日24時間医師・幕内雅敏先生の言葉～」を企画・出版して下さった特定医療法人大坪会会長の大坪修先生に対し、誠に有難く心から感謝申し上げたいと存じます。また、雅敏を理解してご協力、ご支援賜りました多くの方々にも御礼申し上げます。

私は3兄弟の長兄であり、雅敏の出生時から幼少時、成長期と共に過ごし、その後も現在に至るまで身近で共に生きてきた者として、雅敏がどのようにその人格を形成してきたかについて私見を述べ、雅敏をご理解いただく上での一助となればとの思いから筆を執ることと致しました。しかし、兄弟といえども、お互いの考え方、それに基づくと思われる行動、そしてそれらの集合による生き方には細かなところで多くの差異があり、また、十分に理解し得ない所も多々ございます。それらには、父母からそれぞれが受け継いだものもあり、また、個々の成長過程で学習したもの、経験から獲得したものなど種々あると存じます。私見を交えることとなりますが、可能な限り客観的に申し述べてみたいと存じます。

幕内雅敏は1946年8月に東京で生まれました。父親は東京慈恵会医科大学を卒業し、日本赤十字社中央病院に勤務する外科医でありました。私は学生時代時々父の手術の助手を致しましたが、その手術は的確で無駄がなく、流れるような素晴らしいものでした。兄弟3人とも

に学芸大学付属世田谷小学校、同中学校、都立日比谷高等学校と同じ道を進み、その後分かれて私は慶應義塾大学医学部へ、弟2人は東京大学医学部へと進学しました。そして大学卒業後、私は当時難しかった食道外科へ、雅敏は当時注目され始めた肝臓外科へ、末弟晴朗は日本が遅れをとっていた心臓血管外科へと、なんと3人共に外科医を選択しました。“何で3人共に外科医なんだ。もっと多くの医学分野があるのに”と3人共に思いましたが、“自分は外科だ”とお互いに思っていたようです。

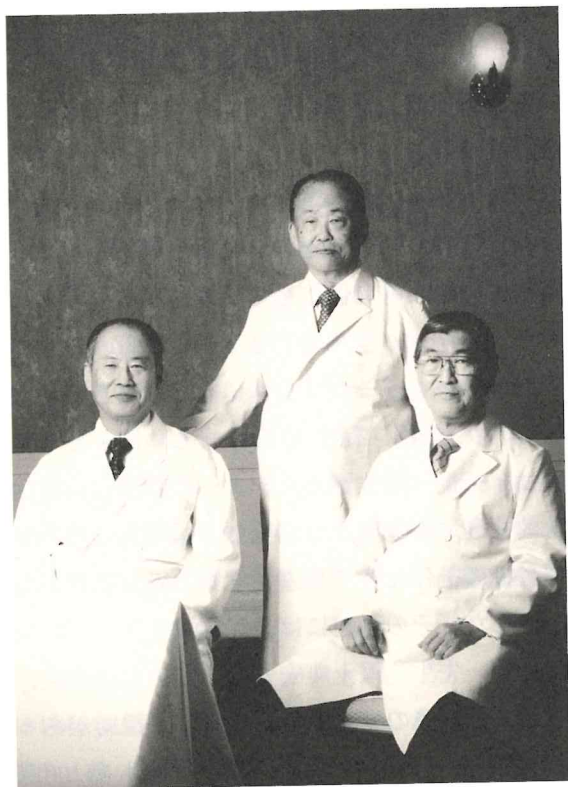
幕内家の家訓には「親子兄弟同じ職場で働くな」というのがあります。流石に同じ職場や同じ専門分野ではありませんでしたが、3人共臨床医で勤務医、そして3人共教授で病院長という困難な道を選択し、その上定年後も10年以上勤務医を続けるという劣悪な生活様式を選択したのは、血筋なのでしょうか、父親の影響でしょうか。

ここで、雅敏が兄弟の中で傑出している事項をお示しします。一つはお酒が飲めることです。父も他の2人も全く弱いのですが、雅敏だけはかなり飲めます。もう一つは女性にもてることで、なぜかもてますし、かなりの“女好き”です。うらやましい限りです。

さて、雅敏は卒業後、国立がんセンターに勤務し、術中超音波を駆使した「系統的肝区域切除術」を開発し、信州大学第一外科教授を経て、出月康夫教授の後任として東京大学第二外科教授となり、生体肝移植へと進みました。その過程には長谷川博先生、川崎誠治先生、木村理先生、窪田敬一先生、國土典宏先生、高山忠利先生、菅原寧彦先生、他、多くの先輩後輩の先生方のご協力、ご援助があったこと、兄として厚く御礼申し上げたいと存じます。また、第106回日本外科学会を主宰するにあたっては、全国の外科医の先生方には本当にお世話になったと心から感謝していました。東京大学を定年退職後、日赤医

療センターの院長となりましたが、事務方には評判が悪かったようです。その後、大坪会東和病院の院長も勤めさせていただきました。今後、人生の終末期をどのように過ごすべきか兄弟で話し合っているところです。

最後に大坪修先生はじめ、本書の出版にご尽力いただきました井出浩之様、西井克委様、渡邊紳一郎様、弟と共に働いて下さった先生方に心より感謝申し上げます。



外科医・幕内3兄弟

(左より、次男・雅敏氏、長兄・博康氏、三男・晴朗氏)

The Calling of a Surgeon

— Words by Dr. Masatoshi Mukauchi —